

2007年7月17日

# 脱レーニン

JOMON あかでみい 山田 学C  
arigatou@image.ocn.ne.jp

## 1 わたくしの担当

かつてのソビエト社会主義共和国連邦という国家の背景にあったらしい利権関係などについてはたとえば広瀬 隆氏が『赤い楯』(文献 15) などにおいて言及しています。わたくしは自身が置かれた生活と仕事の状況においてそのような調査を得意とするところではなくたとえば広瀬氏の報告についてわたくしとして批評できる段階にありません。

本稿において問題にするのはレーニン (1870 ~ 1924) の理論です。すでに1964年に三浦つとむ氏が『レーニンから疑え』(文献 1) という画期的な問題提起をしています。それは三浦つとむ選集 2 『レーニン批判の時代』(文献 2) にも収録されています。

『レーニン批判の時代』においてわかりやすく編集されていますが、三浦つとむ氏はレーニンの真理論における誤りと国家論における誤りを厳正に指摘しました。国家論に関しては現実論としての規範論を具体化した現実論としての国家論を構築しつつある滝村隆一氏の仕事があります。(文献 3 が代表) ただし、滝村氏は文献 3 の上 p316 ~ 317 において自分が三浦氏の立場の継承者として評されることは願っています。ともかくわたくしは滝村隆一氏による国家論 (およびレーニン国家論批判) に敬意をもち学びつつある立場であり本稿においてレーニン国家論は扱いません。

本稿においてはレーニンの真理論を批判します。三浦氏の指摘に学びつつもわたくしなりにレーニンの『唯物論と経験批判論』(文献 5) を批判いたします。

今さらなぜレーニンか？

1956年2月にフルシチョフの秘密報告 (スターリン批判) がありました。わたくし自身はその翌月の1956年3月に生まれました。したがって、「スターリンが神様扱いされていた時代」の人々の想いをわたくしは知りませんが、「スターリンがだめならいったいどうすればよいのだ？」と真剣に大人たちが語っていた時代の人々の想いは子どもなりに継承しています。結局、レーニンを理論的に超えることこそは20世紀思想に正しくけじめをつけそこからまともに卒業するために必須の仕事です。しかしその仕事は時代の情念的な立場からしてわたくしの年代あたりがもっともとりくみやすいのであると感じます。

## 2 マッハとエンゲルスとレーニン

『唯物論と経験批判論』は、物理学者のマッハの影響を受けたロシアの思想

家・政治家を、マルクス、エンゲルスを継承したと自称する政治家・レーニンが批判した本です。21世紀のわたくしから言わせれば、マッハにも問題があり、レーニンにも問題があり、どっちもどっち、ということです。

まずマッハの長所と短所を確認しておきます。

マッハによる問題提起をわたくしなりに言い直せば、物理学・計測論・統計学・感覚生理学・認識生理学・認識学・量論の区別と連関 でありましょう。ただしマッハはその際、計測・感覚・数式にとらわれ物理学の本質論・構造論や認識における概念を軽視しました。「物理の現象を人間によるその感覚に解消する」という誤りもあります。ただし、今の権威的な物理学も同様の短所をかかえ込んでいます。

マッハが「思惟経済」と称して強調した内容は以下です。

数式などにおいて対象認識の抽象性を正しく簡潔に表現する記号規範を工夫することが数学・物理学その他における判断・推論を早くする。すなわち学問推進における表現論です。

次にレーニンの真理論が問題であるのはエンゲルスの真理論と明らかに異なるからです。エンゲルス『反デューリング論』第一篇「哲学」第九章「道徳と法永遠の真理」から引用します。(訳文・頁数は文献 9 岩波文庫版上巻のもの) わたくしたちは 19 世紀後半のエンゲルスのこの発言の深い謙虚さにあらためて注目すべきです。

... われわれはむろんどう考えてみてもおそらく人類史のかなりはじめの方にいるわけで、われわれを訂正するであろう世代の数の方が、われわれがそれらの人々の認識を - 実にしばしばそれを相当に軽蔑しながら - 訂正しうる立場にある世代の数よりも、おそらくはるかに多いと思われるからである。(p145)

... 思考の至上性はきわめて非至上的に思考する人間の系列を通じて実現され、真理性を主張する無条件的な権利をもつところの認識は相対的誤謬の系列を通じて実現されるのであって、前者も後者も人類の生命の無限な存続を通じてでなければ、完全に実現されることはできないのである。(p146)

... 人間の思考は至上的であるとともに至上的でなく、またその認識能力は無制限であるとともに制限をもっている。素質、使命、可能性、歴史的終局目標から見れば、至上的であり無制限である。個々人の実行とそのつどつどの現実とから見れば、至上的ではなく制限をもつものである。(p146)

わたくしはこのエンゲルスの真理論を正しいと考えます。そしてエンゲルス

の真理論を正しいとするならば、レーニン以降に横行した「左翼政党無謬論」は実は論外なのです。

一方、レーニン『唯物論と経験批判論』第二章「経験批判論の認識論と弁証法的唯物論の認識論、その二」五「絶対的真理と相対的真理、あるいは A・ボグダーノフが発見したエンゲルスの折衷主義について」から引用します。(訳文・頁数は文献 5 新日本文庫版のもの)

... 人間の思考はその本性からいって、相対的真理の総和からつくりあげられる絶対的真理を、われわれにあたえることができるし、また現にあたえている。... (上 p194)

### 3 相対的真理

人間による認識が現実の体内と世界を正しく反映しているか否か。正しく反映していればその認識は真理であり正しく反映していない部分があればその認識はその部分において誤謬です。

学問においてたとえば「電圧値と電流値は比例する。」という認識があります。しかし一定の条件をはずれると「電圧値と電流値が比例しない。」こともあります。「電圧値と電流値は比例する。」という認識が真理であるのは世界のうち一定の条件を満す限られた範囲を対象とする場合のみです。その限られた範囲を対象として「電圧値と電流値は比例する。」という認識は絶対的真理です。一般にある認識が絶対的真理であるためには認識対象としてその適用範囲というものがあります。

ですから一般にいかにも真理らしい認識であっても一定の適用範囲があり適用範囲から逸脱しなければ絶対的真理であり適用範囲から逸脱すると逸脱した部分において誤謬となります。ですから一般に真理らしい認識はすべて「どちらかと言えば真理である。」という相対的真理なのです。

エンゲルスは、当時のデューリングという学者、数学などにとらわれて「われは絶対的真理に到達した！」と思いがちな学者を批判する過程において、以上のような真理論を提出しました。マルクス、エンゲルスはマルクス、エンゲルス以前から比べれば学問を深く大きく前進させましたが、それでも自分たちの学問（認識）にも適用範囲があり相対的真理であることを謙虚に自覚していました。古今東西、深く大きく真理を把握した人ほど、自分の認識の限界を謙虚に自覚しているものです。

マルクス、エンゲルスを継承したと自称する政治家・レーニンも、彼が深い理論家であり優れた実践家であったことをわたくしは否定しません。しかし今度は、哲学者のカントに不満をもち哲学者のヒュームの懐疑主義などにひかれたマッハらを、レーニンは批判相手としました。計測・感覚・数式にとらわれ

ものごとをあまりにも相対的に考えすぎるマッハらを、批判相手としました。そのあまり、レーニンが当面の指令の絶対性を強調しがちな政治家であったこともあり、レーニンは「絶対的真理」を強調しすぎる結果となりました。エンゲルスの真理論を継承しない、という結果となりました。先の引用を確認してください。エンゲルスが「われわれは」「人類史のかなりはじめの方にいる」が「人類の生命の無限な存続を通じて」こそ「実現される」とした「思考の至上性」を、レーニンは「絶対的真理」と呼び、しかも「人間の思考は」それを今すでに「現にあたえている。」としてしまいました。いかなる認識も一定の適用範囲から逸脱しない限りにおいて絶対的真理であるという、エンゲルス真理論の深い謙虚さが、どこかへ行ってしまいました。これは明らかに、レーニンのエンゲルスからの学問的な後退でした。しかし事實は、ロシアという後進地域において、レーニンの学問的な後退が逆に、「哲学のレーニンの段階」として賛美され、レーニンの諸文献が聖句化されてしまいました。このことを早くから鋭く指摘したのが、日本の三浦つとむ氏でした。

#### 4 無謬論？

20 世紀において特徴的な左翼運動の背景にたとえば広瀬 隆氏が報告するような何らかの国際的利権関係があったことは否定できないと思います。しかしそれのみでなく、多くは善意において参加した無数の民衆のこころを深く傷つけてしまった「左翼政党無謬論」(質問・意見・修正案の弾圧)の阿鼻叫喚の根因はレーニンの不用意な言説にありその言説の聖句化にありました。脱レーニンを望みます。先のエンゲルスの引用にある「真理性を主張する無条件的な権利をもつところの認識は相対的誤謬の系列を通じて実現される」は、マルクス、エンゲルスを継承したと自称する後世の「左翼政党無謬論」をもとても哀しく予告してしまっていました。

ちなみに、わたくしの山田<sup>まなぶ</sup> 学は実は筆名ですが、わたくしによる認識は死ぬまで相対的真理でしかありません、死ぬまで学ばさせていただきます、というエンゲルス真理論の謙虚さの覚悟の表明です。人間はおたがいの相対的真理をもちあい助けあうしか道はないのでないでしょうか。戦争なんかやっている場合ではありません。

社会の問題はおたがいさまにおいておたがいの自分自身に原因があります。おたがいにまず相手ではなく自分自身のほうの原因を現実論として把握する。すると解決することが早いです。たとえば人間社会がまだ健康平和でないのはわたくしおよびわたくしの組織がまだ実力不足であることがその一因であるとまずわたくしはみなします。

マルクス、エンゲルスや三浦つとむの学問は相対的真理ですがその適用範囲がひろい普遍的な現実論です。わたくしもそういう学問をめざしています。た

だし、普遍的な現実論に対して、無自覚的な架空論の人や、一方、特殊的個別  
的な限定において認識に専念している人が、まずは情念において反発したくな  
るようです。そういう認識の理があるようです。「自分の夢（無自覚的な架空  
論）を否定するのではないか ...」とか、一方、「自分のような専門性の努力を怠  
けているのではないか ...」とか。そういう情念をも尊重しつつ現実論としての  
学問や芸術として交流・対話・討論をわたくしたちはしだいに深めさせていた  
だきます。

## 5 ソビエト？

かつての国名にあったソビエトとは、会議という意味です。少くとも当初の  
志としては、現実論としての討論を大切にしていたのでしょう。しかし、人  
間社会の思考統合のための討論がまともに行われるためには、指導者や運営者  
が深く大きく現実論としての学問を身につけていることが大前提であり、なお  
かつそれも相対的真理であると謙虚に自覚し、民衆による質問・意見・修正案  
にまともに耳を傾ける姿勢が必要です。歴史的な事実として、ソ連共産党は単  
純な思想強制に終わりました。唯物論（現実論）と自称する観念論でもありまし  
た。

そしてソ連邦元首は、ソ連共産党書記長なのか、ソ連最高会議議長なのか、  
ソ連大統領なのか、国家論としてもあいまいなまま、スターリン プレジネフ  
ゴルバチョフにおける自己規定が変化しました。超国家的理論が大切なのか  
（書記長）、国家的討論が大切なのか（最高会議議長）、国家的実践が大切なの  
か（大統領）、という人間と社会の根本問題が、あいまいなまま変化しました。

## 6 新しい日口外交

本稿はレーニン批判です。マッハの影響を受けた物理学者の批判に関しては  
いずれ別稿を提出します。

冷戦においてソ連に勝利した USA の哲学はプラグマティズムです。プラグ  
マティズムの成果であるとも言える商業経営理論は日本において渥美俊一氏が  
『商業経営の精神と技術』（文献 11）などにまとめた。わたくし自身は商業経  
営の素人ですが論理的にそのように理解しています。

『資本論』（文献 14）に代表される、マルクスの学問ももちろん相対的真理  
ですが、むしろマルクスの学問の真理の深さはソ連の哲学者によってこそ隠さ  
れてきたとわたくしは考えています。

コミンテルン・コミンフォルムなどの世界「社会主義」運動が宗教顔負けの  
教条主義であり挫折した根因はレーニン真理論にありました。フランシス・ベ  
ーコンに始る学問の謙虚さと柔軟性をもちえなかったから挫折しました。

現在、米中関係のはざまにおいて日本・台湾・南北朝鮮のゆれ動きがあり、

そういう中において日ロ外交をどう考えていくか。日本国民の自立・地方の自立・日本国の自立をどう追求していくか。そしてベネズエラ (IMF と世銀を脱退) やイラン (核開発) の世界反体制運動もどう考えていくか。JOMON あかでのみい健康平和学は現体制か反体制かという階級闘争でなく新体制という階級循環と諸民族調和を追求します。

日本民族のルーツは北方面からの部族、南方面からの部族、西方面からの部族の混合であると考えられます。そのうち北方面からの部族はシベリアのバイカル湖の南あたりがルーツであるという説もあります。

江戸時代には「ロシアはおそろしや ...」といった日本民族の情念もありました。

20 世紀初頭には日露戦争もありました。

21 世紀のこれからは本稿のレーニン批判のあとに健康平和な日ロ討論および健康平和な日ロ交易を願いたいものです。

なお、三浦つとむ氏によるかつてのソ連社会の批評は文献 16 がわかりやすいです。また、森川方達『満蒙幻影傳説「聖戦」灰滅史を旅する』(文献 17) も挙げておきましょう。この本の著者はフリー・ジャーナリストですが、かつてマスコミ関係者がよく丸くならびすわっていた (ソビエトならぬ) “円卓会議” というスナックのマスター = 料理人もやっていました。この本は食うという生活の根本をありのままに書く、取材旅生活日記というおもしろい文体です。日本とロシアのあいだの満州蒙古などの歴史と現在について調べ想う旅生活日記です。フリー・ジャーナリストたちのホンネが勇気づけられるのかもしれない。さりげない主体的批評となっているのかもしれない。脱マスコミ通信へのひとつの試みでしょうか。JOMON あかでもみいも新しい通信ルートを追っています。将来はやすらぎ茶室チェーン “るね” (仮称) を夢んでいます。

ロシアはヨーロッパとアジアにまたがる大国であり日本はもっとも欧米化したアジアの国家でありそれぞれなりにヨーロッパ文化とアジア文化の矛盾の解決という 21 世紀的課題をすでに先取りして国内にかかえ込んでいます。この点において日本とロシアが交流し協力しあえる点を発見していくことこそこれからの世界健康平和運動において大切ではないでしょうか。またたとえば日露戦争や米ソ冷戦のためにあったような日本政治の官僚中心の中央集権戦闘体制はすでに制度疲労しつつあります。ところで三浦つとむ氏のように早くからレーニン真理論を厳正に批判できる人が日本の文部科学官僚の中に今までにいたのでしょうか。

実践のために最後にひとつのヒントです。2007 年 5 月に為末 大『日本人の足を速くする』が新潮新書として出ました。(文献 19) 著者は 1978 年生れの著名な 400m ハードル競技プロ選手です。400m ハードル競技における日本民族的な認識と労働をどこまで向上させていけるか? 為末 大選手は自主的に

目標を立て実行する模範です。日本民族の認識と労働一般にとりさまざまな興味深いヒントがあります。陸上競技の専門分野が一般の人にもわかりやすく書かれています。為末選手は日本国の新しい時代をまさしく足により切り拓く今風な忍者のようにわたくしには映ります。健康平和忍者と言ったらよろしいか…。長期練習計画において思考することが大切なハードル競技の日本民族的戦略を書いたこの本には欧米的戦略にとらわれない自由な発想があります。野球のイチロー選手にも通じます。そしてプロ選手はさまざまなことをいかに細かく深く考えているか…。陸上競技は大地の競技であり、人間にとり走るとは労働姿勢の根本であり、日本民族らしく走るとは日本民族の労働姿勢の根本です。そういう視点がレーニンの労働観にはなかったでしょうが…。ともかく 2007 年からのわたくしたちは為末 大選手を先頭とする日本の 400m ハードル競技の学問的芸術に注目し応援いたしましょう。思い出したくもないスターリンらの「論争」より夢があり学びがあるではありませんか。

〔文献〕本稿のために以下の文献を参照しました。

- 1 三浦つとむ『レーニンから疑え』（芳賀書店 1964 年）
- 2 三浦つとむ選集 2『レーニン批判の時代』（勁草書房 1983 年）
- 3 滝村隆一『国家論大綱 第一巻 上・下』（勁草書房 2003 年）
- 4 木村明生『ロシア・ソ連・ロシア断絶と継承の軌跡』（彩流社 2000 年）
- 5 レーニン『唯物論と経験批判論 上・下』（森 宏一訳／新日本文庫 1979 年）
- 6 エルンスト・マッハ『マッハ力学史古典力学の発展と批判上・下』（岩野秀明訳／ちくま学芸文庫 2006 年）
- 7 エルンスト・マッハ『認識の分析』（廣松 渉・加藤尚武編訳／法政大学出版局 1971 年）
- 8 エルンスト・マッハ『感覚の分析』（須藤吾之助・廣松 渉訳／法政大学出版局 1971 年）
- 9 エンゲルス『反デューリング論オイゲン・デューリング氏の科学の変革上巻』（粟田賢三訳／岩波文庫 1974 年改版）
- 10 山田 学『学問の転換未来の世界を日本から』（民衆図書刊行会 1994 年）  
[www.jomaca.join-us.jp](http://www.jomaca.join-us.jp) 参照
- 11 渥美俊一『商業経営の精神と技術』（商業界 1988 年）
- 12 三浦つとむ『弁証法はどういう科学か』（講談社現代新書 1968 年）
- 13 沖 正弘『生きている宗教の発見だれでも悟り救われる沖ヨガ修行法』（竹井出版 1985 年）
- 14 マルクス『資本論(一)～(九)』（エンゲルス編向坂逸郎訳／岩波文庫 1969～1970 年）
- 15 広瀬 隆『赤い楯 ～ 』（集英社文庫 1996 年）
- 16 三浦つとむ「ソ連旅行記」三浦つとむ『生きる・学ぶ』（季節社 1982 年）所収
- 17 森川方達『満蒙幻影傳説「聖戦」灰滅史を旅する』（現代書館 2005 年）
- 18 金子仁洋『地方再興官と族議員は地方の敵にまわるか』（マネジメント社 2007 年）
- 19 為末 大『日本人の足を速くする』（新潮新書 2007 年）

本稿をかつてのわたくしの左翼運動の同志に捧げます。